

〔松田教授開講拾週年記念論文〕

## 急性化膿性甲狀腺炎症例

金澤醫科大學耳鼻咽喉科學教室(主任松田教授)

醫學士 小 泉 貞 介

Teisuke Koizumi

(昭和16年9月19日受附)

## 内 容 抄 録

症例ハ13歳ノ男子ニミラレタル急性化膿性甲狀腺炎ニシテ之ガ原發疾患トシテハ扁桃腺炎並ニ感冒ヲ考ヘル事ヲ得。合併症候トシテハ氣管、食道ノ壓迫、反回

神經麻痺並ニ頸部交感神經網壓迫ニ依ル縮瞳ヲ著明ニ認メタリ。脱落症状ヲミルコトナク切開排膿藥物療法等ニヨリ全治セシメ得タリ。

## 目 次

緒 言  
症 例

總括並ニ考按  
結 論

## 緒 言

甲狀腺ハ排泄管ヲ有セズ、内外二層ノ被膜ヲ以テ被ハレ周圍ハ緻密ナル筋膜筋層ニテ圍マレ且豊富ナル血行並ニ淋巴管ヲ有シ、更ニ甲狀腺内ニ含マル、膠狀物質ハ強力ナル殺菌力ヲ有スル沃度ヲ多量ニ含ミ炎症ヲ未然ニ防ギ、化膿性炎症ニ導カザル爲ノ多大ノ自衛力ヲ有スルモノト考ヘラレル。カ、ル理由ニ依リテカ甲狀腺ニ

來ル炎症ハ稀ニシテ殊ニ外傷甲狀腺腫等ヲ有セザル健康ナル甲狀腺ニ來レル急性化膿性炎症ハ甚ダ稀有ニシテ我國ニ於テ報告セラレタルモノ僅々十例餘ニ過ギズ。今回余ハカ、ル症例ヲ經驗シ興味アル經過ヲ取り幸ニシテ治癒セシメ得タルヲ以テ茲ニ報告シ御批判ヲ仰ガントスル次第ナリ。

## 症 例

患者 藤井某、11歳、男、小學生。

家族歴 父母並ニ兄弟四人健在ニシテ、特記スベキモノナシ。

既往症 6歳ノ時「バラチフス」ニ罹リタルモ其後健康ニシテ、殊ニ最近ハ健康兒童トシテ表彰サレシ事アリ、著患ヲ知ラズ。特ニ頸部ノ外傷ヲ受ケシ事ナク、

頸部ノ腫脹セシ事無シト云フ。

現在症 7月18日ヨリ軽度ノ咽頭痛並ニ腹痛アリタルモ放置シ通學シ居レリ。7月20日放課後歸宅セルニ突如40°ノ發熱アリテ頭痛頸部痛及咽頭痛ヲ訴ヘシ爲内科醫ノ診察ヲ受ケタルニ感冒兼咽頭炎ト診斷サレ治療ヲ受ケタリ。然ルニ其後モ38°乃至40°ノ高熱持續シ

23日ニ及ビテ左側頸部ニ強度ノ疼痛ヲ伴ヒテ膨隆ヲ來シ、頸部ノ壓迫感緊張感ヲ訴ヘ流動物モ嚥下シ得ズ。呼吸困難ヲ加ヘ26日内科醫ノ奨メニ依リ來院セリ。

來院時所見 骨骼中等度羸瘦シ顔面ハ蒼白苦悶狀ヲ呈シ、體溫 38.6° 脈搏頻數ニシテ少時昏睡狀態ニ陥ル。頸部ノ廻轉並ニ屈曲運動ハ全ク不能ニシテ、頭ハ右側方ニ廻轉セシメタル狀態ニ固定サレタリ。瞳孔ノ大キサ左右不同ニシテ、左側ニテ強度ノ縮瞳ヲ認メ瞳孔反射ハ著シク減退シ、眼前ニテ手動ヲ辨ゼズ。電燈ノ光ヲ判別シ得ルニ過ギズ。眼球ノ位置ハ正常ニシテ眼球突出ナシ。呼吸ハ促進シ、咳嗽頻ル多シ。打診及聽診上心肺ニ著變ヲ認メズ。腹部諸臟器ニ異常ナク、肝脾腎ヲ觸レズ。四肢關節ニ異常ナク膝蓋反射ハ消失セリ。尿ニ糖蛋白共ニ陰性ニシテ白血球數2万7千赤血球數415万、血液「ワ」氏反應、村田氏、「マ」氏反應共ニ陰性ナリ。

耳鼻咽喉科の所見 耳鼻ニ著變ナク、口腔ニ於テハ兩口蓋扁桃腺及咽頭粘膜ハ發赤腫脹シ舌ニハ厚キ褐色ノ苔ヲ有ス。喉頭ハ鏡檢スル事能ハズ。

局所々見 前頸部舌骨ヨリ鎖骨ノ高サニ到ル迄左側ニ於テ強キ腫脹ヲ呈ス。即ち甲状腺左葉部ヲ中心トシ、



(手術ノ翌日)

上下 6.5cm、左右 4.5cm ノヤ、扁平不整形ノ膨隆ヲ呈ス。下部ハ上部ヨリヤ、腫脹強ク表面皮膚ニハ輕度ノ發赤アルノミニシテ、嚥下運動ニ際シ僅カニ移動ス。觸診スルニ腫脹ハ硬結シ強度ノ壓痛アリ、波動ハ著明ナラザルモ上部ニ於テ僅カニ認メ得タリ。

手術所見並ニ經過 入院當日頸部正中線ヨリ約 2.5 cm 左方即腫脹ノ略々中央部ニ於テ縦ニ長サ 5 cm ノ切開ヲ加ヘ軟組織ヲ左右ニ壓排シテ深部ニ進ムニ二層ノ被膜ニ包マレタル暗赤色ノ甲状腺左葉ニ達セリ。試験穿刺後一層ヅ、被膜ヲ切開セルニ壞疽狀絮片ト共ニ約 15cc ノ濃厚惡臭アル黄褐色ノ膿汁ヲ排出セリ。出血ハ輕度ニシテ、甲状腺狹部及左葉下部ニ硬結セル腺組織ヲ有スルモ左葉上部ハ殘存セズ。護膜排膿管ヲ挿入シ手術ヲ終リタリ。膿汁ヨリハ連鎖狀球菌ヲ證明セリ。第2日體溫ハ 37.5° ニ下降シ呼吸困難ハ去リ視力ハ略ボ正常ニ恢復シ瞳孔ノ縮小亦輕快セリ。然レ共嚥下困難嘔聲ハ依然トシテ、強度ニシテ流動物ノ攝取モ不能ナリ。創口ヨリハ惡臭アル膿汁ヲ多量ニ排出セリ。1日2回ノ交換ヲ行ヒ、「リバノール」液洗滌、滋養灌腸、「バンセブチン」「ロゼノン」注射ヲ施行セリ。第3日體溫 38.0°、切開創ヨリ甲状腺下葉部ヲ消息子ヲ以テ觸レタルニ殘存部ノ下部ヨリ約 10cc ノ濃厚ナル膿汁ヲ排出セリ。即ち左葉中部ニ於テ一部ノ硬結セル腺部ヲ有セルノミニテ下部ハ全ク壞疽トナリ居リシヲ知レリ。依リテ左葉全部ヲ剔出スルノ止ムナキニ到レリ。第4日創口清潔トナリ膿汁モ大イニ減量セルモ嘔聲ナホ強度ニシテ喉頭ノ鏡檢不能ナリ。第11日ニ到リテ始メテ流動物ノ逆流ナク攝取シ得ルニ至リ喉頭モ檢査可能トナレリ。喉頭ヲ檢スルニ聲帶ハ左側ニ於テ反回神經麻痺ノ症狀ヲ呈セルヲ確メタリ。依リテ感應電流ヲ使用シ硝酸「ストリヒニーネ」療法ヲ併セ行ヒタリ。第27日創口漸ク清潔トナリタルヲ以テ縫合ヲ行ヒ第31日目ニ瞳孔縮小、嚥下困難ハ全ク快癒シ全身狀態モ良好ナル爲退院セシメ、45日ニシテ甲状腺脱落症狀モ認メズ反回神經麻痺モ全治セリ。

## 總括並ニ考按

以上ノ症例ハ臨牀的並ニ手術的所見ニ依リテ、急性化膿性甲状腺炎タルハ略ボ疑ヒノ餘地ナク本人並ニ家族ノ言ニ依リテ甲状腺腫、打撲等ヲ否定シ得ルヲ以テ健康ナル甲状腺ニ來レルモノト考ヘ得。甲状腺ノ炎症ハ大別シテ甲状腺

炎ト甲状腺腫炎トニ分類セラレ、甲状腺炎ハ甲状腺腫炎ニ比シ遙カニ稀有ナルモノトサレ、殊ニ急性化膿性甲状腺炎ハ Rabertson 氏ニ依レバ甲状腺炎ノ1/5ニ過ギズト言ハル。甲状腺ノ急性炎症ノ素因トシテハ外傷、鬱血、體力低下等ニ

シテ、Klose, Kocher 氏等ハ病理學的ニ血行障碍、腺實質變化、出血、退行變性等ヲ擧ゲタリ。而シテ甲状腺腫ニテハ血管ヲ荒廢、膠狀物質ノ變化ガアリ、妊娠、月經時ニテハ充血アリ、傳染病ニ於ケル甲状腺ニ就キテハ Roger, Gornier 氏等ノ研究ニ依レバ、始メ甲状腺ハ分泌増加ノ状態トナリ其後、分泌物質ノ性狀變化シ遂ニハ膠狀物質ノ分泌停止ニ到ル事實ガ證明セラレタリ。此ノ觀點ヨリ考察スレバ甲状腺ノ炎症ガ甲状腺腫、傳染病患者並ニ妊娠ト月經ノ關係上女性ニ多ク殊ニ20歳乃至40歳ノ壯年ニ多ク來ル事ヲ證明スル有力ナル根據ヲナスモノト考フル事ヲ得。甲状腺ノ炎症ノ發來ニ就キテハ原發性ト轉移性トニ分チ考ヘ得ルモ傳染經路ハ主トシテ轉移性ニシテ Roger 氏ハ原發性ヲ唱ヘシモ、多クノ學者ノ容ル、處トナラズ、Edwards, De Quervain 氏等ハ原發性ノモノハ認メラレズト極言セリ。即傳染病殊ニ「チフス」、「ヂフテリア」麻疹ヲ始メ關節「ロイマチス」、咽頭炎、扁桃腺炎、流感、肺炎等ヨリ來ル事多ク、時ニ胃潰瘍、大腸加答兒等消化器病ヨリ來ルモノモ報告セラレタリ。轉移經路ハ Kocher, Torri, De Quervain 鈴木氏等ニ依レバ血行ヲ介シテ轉位ヲナスモノト解釋セラレタリ。此ノ點ハ甲状腺ノ解剖學的關係即二層ノ被膜並ニ緊密ナル筋肉層ニ圍マレ獨立シ只血行ニヨリ他ノ器官ト連繫ヲ有スルニ思ヒ到ラバ容易ニ首肯シ得ラル、トコロト考ヘラルベシ。余ノ症例ニ於テモ恐ラクハ扁桃腺炎ヨリ血行ヲ介シテ轉移性ニ甲状腺ガ侵襲セラレタルモノト解セラルベシ。

症狀ノ一般及合併症トシテハ多クハ突如惡寒戰慄ヲ以テ高熱ヲ發シ嘔吐、頭痛、咳嗽ヲ來ス事ヨリ始マル。2、3日ニシテ前頸部ノ緊張感ト共ニ浸潤腫脹ヲ來シ、局部ノ疼痛ハ強ク頸部一體並ニ頭部ニモ放射性ニ疼痛ヲ訴フルニ到ル。次イデ食道氣管ヲ壓迫スル爲嚥下困難、呼吸困難ニ陥リ、更ニ反回神經麻痺ヲ來シ噎聲ヲ生ズルニ到ルモノアリ。更ニ進ミテ膿瘍ガ食道ニ或ハ氣管ニ自潰シ爲ニ窒息死ヲ來セシ症例モ報告セラレタリ。時ニハ敗血症ヲ惹起シ不幸ナ

ル轉歸ヲ取リタル例モ報告セラレタリ。又稀ニハ Herz, Steckmann 氏等ノ症例ノ如ク頸部交感神經網ヲ壓迫シ眼瞼下垂、瞳孔縮小、發汗分泌減少ヲ來セシモノアリ。木場丸山氏等並ニ余ノ症例ニ於テモ著明ナル瞳孔縮小ヲ認メタリ。腺ノ破壊ニ依ル脱落現象トシテハ急性「バセドウ」氏病ノ症狀、粘液水腫、副甲状腺ヨリノ「テタニ」症狀等ガ考ヘラル、モ本邦ノ12例ノ報告中ニハ之ヲ認メタルモノナシ。

統計的ニ觀察スルニ外國ニテハ性別的ニハ女性ニ多ク年齡的ニハ20歳乃至40歳ノ青壯年ガ大部分ヲ占メ部位ハ右側ニ原因トシテハ「チフス」口峽炎、流行性感胃、關節「ロイマチス」、「ヂフテリア」ガ多イト述ベラレタリ。合併症トシテハ食道壓迫、氣管壓迫、反回神經麻痺等ガ最多ニシテ、死亡率ハ Kocher 氏ニ依レバ19%ナリト報告セラレタリ。我國ノ12例ノ報告ニ就キ見レバ、ヤ、趣ヲ異ニシ男性9例、女性3例ニシテ、男性ニ多ク患側ハ左側7例、右側2例、兩側3例ニシテ左側ニ多ク年齡的ニハ4歳ヨリ52歳ニ及ビ19歳以下5例、20歳—40歳3例、41歳以上4例ナリ。原因トシテハ口峽炎6例ニシテ最も多ク、「チフス」、胃腸「カタル」、手術後ノ敗血症、「インフルエンザ」、急性「ロイマチス」、不明各1例、尙口峽炎ニヨルモノ6例中1例ハ妊娠中ナリキ。死亡率ハ全治8例、死亡4例ニシテ約33%ニ當ル。起炎菌トシテ直ニ斷定ハナシ得ザルモ、膿汁中ヨリ培養並ニ鏡檢ニヨリ發見セルモノハ葡萄狀球菌ノミノ場合4例、溶血性連鎖狀球菌2例、葡萄狀球菌ト連鎖狀球菌トノ混合ニヨルモノ2例、連鎖狀球菌葡萄狀球菌、大腸桿菌並ニ球菌等ノ混合ニヨルモノ1例、記載ナキモノ3例ナリ。以上我國ノ統計ト諸外國ノ統計トノ間ニ大ナル相異ヲ見ルモノノ如キモ、或ハ種族ノ相異、生活様式ノ相異、其ノ他原病疾患ソノモノノ頻度ノ相異等ニ依ルモノナランカトモ考ヘ得ラル、モ、最明瞭ニ指摘シ得ル一原因ハ我國ノ症例數ノ少數ナル點ニアリト言フヲ得ベシ。

## 結 論

(1) 余ノ症例ハ11歳ノ男子ノ健康ナル 甲状腺左葉ニ來レル急性化膿性炎症ナリ。

(2) 原發疾患トシテハ扁桃腺炎並ニ感冒ガ考慮セラル。合併症候トシテ氣管食道壓迫、反回神經麻痺並ニ頸部交感神經網壓迫ニヨル瞳孔縮小ヲ認メタリ。

(3) 脱落症状ナク切開排膿並ニ藥物療法等ニ依リ45日ヲ以テ全治セシムルヲ得タリ。

(本論文ノ要旨ハ大日本耳鼻咽喉科會北陸地方會第52回例會ニテ發表セリ)

摺筆ニ臨ミ御懇篤ナル御指導並ニ御校閲ヲ賜ハリシ恩師松田教授ニ滿腔ノ謝意ヲ表ス。

## 主 要 文 獻

1) 柏村, 東北醫學會報, 第23卷, 第1號. 2) 爲末, 臨牀醫學, 第3卷, 第5號. 3) 三宅, 耳鼻咽喉科, 第1卷, 第7號. 4) 掛下, 東北醫事誌, 第2577號. 5) 川口, 佐守, 大阪醫事誌, 第7卷, 第11號. 6) 藤田, 耳鼻咽喉科, 第5卷, 第7號. 7) 星谷, 耳鼻咽喉科, 第4卷, 第7號. 8) 久保, 耳鼻咽喉科臨牀, 第28卷, 第2號. 9) 木場, 丸山, 「グレンツゲビー」ト, 第3卷, 第2號. 10) 鈴木, 日本微生物

學雜誌, 第19卷, 第17號. 11) 金井, 耳鼻咽喉科, 第13卷, 第2號. 12) 橋本, 皆見, 皮膚泌尿科雜誌, 第19卷, 第11號. 13) Denker, Kahler, Handbuch d. Hals- N. O. Bd. 9. 14) Roger et Garnier, Virchow's Arch. Bd. 174 (1903). 15) Edwards, Journ. of America Aso. 1921. 16) De Quervain, Mitteil a. d. Grenzgeb. Med. u. Chir. Bd. 15 (1916).